

別府大学
短期大学部

初等教育科 造形展 2016

造形と遊戯性の記憶

—「内なる子ども」へ向かう 10 の表現—



2016年11月8日(火)–11日(金) 12:00-18:00

場所：「別府市公会堂」第2会議室スペース

〒874-0908 別府市上田の湯町 6-37

「内なる子ども」を呼び覚ます造形的遊戯

別府大学

短期大学部 准教授 吉村 壮明

今回は主に初等教育における「造形遊び」に焦点をあて、基本的に空間（別府市公会堂会議室）そのものを全面的に使用した展示を行います。いわば「表現された箱」としての展覧会です。

美術の文脈ではインスタレーションに近いことが指摘される、この「造形遊び」は保育・幼稚園では、砂場や屋外での子どもの自発的遊びの活動そのものから派生するものであり、まさに形の残らない遊戯性による発見と、その結果としての自由な造形性が顕著な特徴です。また、小学校の図画工作では壁面やパーティション、台座に掲示する「絵や立体で表す活動」が長年、行われてきましたが、現在、学習指導要領では、その活動に加え「造形遊びによる活動」と「鑑賞による活動」が大幅に全学年に導入され、一般的に私たちがイメージする絵や工作の活動は少なくなりました。前者の「造形遊び」には、こういった従来の教育現場におけるコンクール主義や作品主義に対する強烈な批判も込められています。

さて、この画期的とも言える「造形遊び」という活動では、主に砂や葉っぱ、椅子、水、ビニール、石、ダンボール、ロープ、廃材などを使用し、数多くの子どもの活動・授業実践が行われていますが、これら素材からも想像出来るように、子ども達の作品は極めて一過性のものであり、テンポラリーにその場（学校や家庭、地域）にあるあらゆる材料や日常物を使い、子どもの表現活動が行われるのが一番の特徴です。そこには大人からみた技巧性はなく、一見、従来の作品観からすれば、「造形遊び」の作品群は、僅く稚拙な印象さえ受けることもあります。美術作品としてみれば、ある種、キッチンでジャンクかつミニマルな（例えば「具体」や「もの派」の作品のような）表現にも映るはずですが、言うまでもないことですが、自発的な意味での造形的な遊びは、結果としてそれが「作品」として残るだけで、そもそも子どもは美術作家のように「作品」を作ろうという動機で作品制作を行っているわけではありません。砂場で懸命に作られた泥だんごが結果として破壊され、落ち葉の色遊びが風で散らされ、いつしか消失するように、それは「一過性の造形的遊戯」のようです。本来、幼児期や児童期の造形・図画工作を貫く核にあったのは、こういった「遊戯性」を主軸とした活動ではなかったでしょうか。そこには、子どもの感性と日常物との非コンテクスト化された偶発的接触による稀有な「一瞬の輝き」があるはずなのです。

この会場である「別府市公会堂」は昭和3年に建設された建築物で、若き建築家の吉田鉄郎氏が設計し、その昭和初期モダニズムとしての芸術性は、まさしく泉都の別府に相応しい建築物だったと言えますが、この2016年にはリノベーションされ、かつての昭和モダンとしての空間が、まさに新たに再現されています。この過去の価値を見つめ、それを壊すことなくリノベートするという作業は、自身の子どもの期を見つめ直し、現代に呼び覚ます行為と実に酷似しています。

本学初等教育科の学生には遊びと造形の体験を通し、まさしく別府公会堂のリノベーションと同様、自身の記憶の根底にある「内なる子ども」に向き合い、それを呼び覚ますことで、将来、子どもの表現活動に関わる保育士や幼稚園・小学校教諭として、幅広い体験と知識を深めてもらいたいと思っております。本展示では、授業で制作・体験した「造形遊び」を中心とする教材や作品を「再現・展示」することで、学生は勿論、子どもの造形活動に関与する参加者の方々に関心を持ってもらうことを狙いとしてきました。是非、子どもに関わる学生たちの造形的遊戯としての片鱗をこの機会に鑑賞・体験していただければ幸いです。

これら10の表現をながめて思い出してみてください。暗い忘却の彼方にあった、まばゆい子ども期の造形的遊戯性に満ちた、あなた自身の「言葉」を。